

番号	28 - 33	申請者	看護師 森山 雄三
<p>【審査申請課題】</p> <p>終日人工呼吸器を装着した重症心身障がい児の退院支援に関する研究 -退院支援を行う看護師の主体的体験の変容プロセス-</p>			
<p>【審査課題の概要】</p> <p>周産期医療や救急医療の発展により、日本の新生児・乳児死亡率は世界を見ても低い数字を保つことができている。その結果救われる命は増えたが、高度な医療的ケアを必要とする小児は増加傾向にありNICUのベッド不足など社会的な問題もおきている。近年は、医療的ケアを抱えた小児の在宅生活をささえるために、訪問看護や介護、発達支援事業所などの社会資源も整えられ、多職種も含めたチームで統一した関わりを行うためにクリティカルパスも作られている。しかし、研究者の臨床経験により、医療的ケアの習得や社会資源の調整が行われても、医療的ケアを必要とする小児の家族内での意見の相違や障がい受容の状況によって、円滑に退院できない小児もいる。</p> <p>本研究は急性期医療から小児在宅医療へ移行するため、病院に入院している終日人工呼吸器を装着した重症心身障がい児（以下、重症児という）及び家族への退院支援に関わる看護師の体験を分析し、人工呼吸器を装着した重症児が退院するまでの時間的経過において、看護師が重症児と家族におきる事柄をどう捉え、対処したのかを明らかにすることを目的とする。本研究でいう退院支援とは、重症児の家族が病気や障がいを理解し、退院後も継続が必要な医療や看護を受けながらどこで、どのような生活を送るかを決定するための支援。また、療養場所の決定後における療養環境や家族状況のアセスメントと、その問題や課題に関する具体的援助と定義する。</p> <p>インタビューにより得た質的データを、修正版グラウンデッドセオリーアプローチを用いて分析し、終日人工呼吸器を装着した重症児とその家族に行われる退院支援の看護における概念および理論の生成を行う。</p>			
審査結果	承認（平成28年12月13日）		